

- 01. ヘルレイザー
- 02. よふかしのうた
- 03. 紙様
- 04. 合法的トビanosメ
- 05. 板の上の魔物
- 06. スポットライト
- 07. 耳無し芳一Style
- 08. 生業
- 09. 阿婆擦れ
- 10. オトナ
- 11. かいこ
- 12. 中学12年生
- 13. トレンチコートマフィア
- 14. クローズ
- 15. Bad Orangez
- 16. 使えない奴ら
- 17. 日曜日よりの使者
- 18. サントラ
- 19. Dr. フランケンシュタイン
- 20. 朝焼け
- 21. かつて天才だった俺たちへ

LIVE REPORT

1/17 sun. 広島クラブアトロ

Creepy Nuts

ビートもトークも絶妙な2人のパフォーマンス

目下絶好調と言っていだらう、MCのR-指定とDJ松永の2人組。昨年メジャー2枚目となるミニアルバム『かつて天才だった俺たちへ』を発表し、初の武道館単独公演も開催。2年ぶりとなる広島公演は声出しNGにもかかわらず、オーディエンスの熱気が伝わってくるホットな会場で行われた。

ステージの上はシンプルである。ターンテーブルが置かれた松永のブースと、マイク1本握りだけのR-指定。街の雑踏のSEで入場した2人は、ジャジーなトラックに乗せ、テンポいいフロウを畳みかける『ヘルレイザー』でスタートする。2曲目は「広島、8時まで目一杯夜更かししていきましょう！」と今の社会状況に絡めつつ『よふかしのうた』。当たり前だが2人とも上手い。テレビ番組【フリースタイルダンジョン】でラスポスを務めたR-指定は力強くエモーショナルなフロウを聴かせ、ラップのみならずメロディ部分では堂々とした歌も響かせる。DJ松永は海外のDJコンテストに日本代表として出場して優勝を勝ち取った肩書き通り、キ

レのいいスクラッチでビートをグイグイ引っ張っていく。上手いMCと上手いDJが組んだパフォーマンスが見応えあるのは当然で、舞台上にいるのはたった2人、それもビートとマイクの切れ味だけでここまで会場を盛り上げることができるのは驚くばかりである。

しかし彼らの魅力は音楽以外にも存在する。曲が途切れたMCタイム、今日松永が寝坊して広島に来るのに3時間半遅刻したという話から、R-指定の遅刻話、そして前回の広島でのエピソードと話題は自在に流れていく。この2人トークが絶妙に“オモロキモチイイ”のだ。ヘヴィなラジオリスナーである2人が愛好するトーク感覚が随所に噴出しているというか、お互い相方のことが好きで仕方ないオードリーのトークにも近い感触というか、止まらない2人の仲良しトークはずっと聴いていたいユルめの幸福感に溢れている。言い方を変えれば、音楽同様MCもフリースタイルの技術が貫かれていて、ビート感も掛け合いも音楽と同一線上にあるのである。

さらにライブが進むと、彼らのワザが一筋縄ではいかないことも伝わってくる。『耳無し芳一Style』での妖しいトラックと断末魔のようなフリーキーなラップ、続く『生業』では奈落に落ちていくループとマッドでサイコなキャラクター。ドープというのかディープでいいのか、心の奥の奥の底まで降りていくスキルとスリルに惹き込まれる。『中学12年生』ではスキットみたいなフロウがあったり、歌詞はこじらせて

いる20代そのもので、その“あるある”な青臭い青春の亡霊こそ彼らの真骨頂であると感じかされる。“わかるわかる”のシンパシーで、ビートにだけでなく心晴めで音楽に乗せられていくのだ。

それがストレートに表現されたのが終盤のセットリストだ。素直な青春メロが心に沁みる『Bad Orangez』、メロウな『使えない奴ら』。互いの傷をなめ合ったところから、ヒロウズの原曲にほぼ忠実な『日曜日よりの使者』で肩を抱き、トドメは盟友・菅田将暉と組んだ胸アツな『サントラ』で駆け抜ける。フロアに立つオーディエンスは声こそ出せないものの、『日曜日〜』のラストではマスクの下でシャララの合唱が聞こえたり、『サントラ』で松永はギターソロ風のスクラッチを決め、R-指定はノドを枯らして絶唱していた。

「ヒップホップは俺らにとってセラピー。歌詞を書くことで自分がわかったり解き放たれたりする」——エンターテインメントと自己表現の両方をスピーカーから叩きつけるサブカル気質のパフォーマンス。ラスト『かつて天才だった俺たちへ』はまるで明日への逃走のようで、この人たち、音楽に囚われないカルチャーシーン全般でもっともっと愛される存在になるだろうと確信しっぱなしの夜だった。

Digital Single

「バレル!!」
out now!!

